

開催報告 第31回中韓日産業安全保健学術会議

友永 泰介¹ 森本 泰夫¹
Tomonaga Taisuke, Morimoto Yasuo

はじめに

第31回中韓日産業安全保健学術会議（The 31th China-Korea-Japan Conference on Occupational Safety and Health）は、2024年6月13日～15日の3日間にかけて中国の西安にあるSlater international hotelにて開催された。第30回は2022年に北九州でハイブリット開催であり、この第31回は本来であれば昨年開催予定であったが、新型コロナウイルス感染症の流行の影響で中国渡航が難しく、今年に延期された。とはいえ、日本と中国の渡航には、以前は短期の渡航では不要であったVISA取得が必要となり、中国大使館や地域の領事館に足を運び手続きする必要がある、日本から中国への渡航のハードルは高かった。このため今回、日本からは8名の参加となった。しかしながら、開催国の中国側は中国全土から参加され、韓国からも30名ほどの参加があり、全体で参加者は300名近くにのぼり盛況であった。また今回から、これまでの会議名にはなかった「Safety」が追加され、産業保健だけでなく産業安全に広がり、様々な領域の研究者、実務家が集まったことも印象的であった。

1. ワークショップ

開会に先立ち、6月13日（水）の夕方からワークショップが開催された。各国の産業保健に関する講演がなされ、中国からは、MA Jun氏よ

りHealthy enterprise（健康企業）を増やす国の施策と達成状況についての報告があった。韓国からは、KIM Ki-Youn氏より水産産業に従事する労働者が水質維持に使用するホルムアルデヒドの作業環境濃度の測定、ばく露評価に関する報告がなされた。日本からは、森本泰夫氏より、建築物の解体作業におけるアスベストばく露について、本邦で実施している5管理（作業環境管理、作業管理、健康管理、労働衛生教育、総括管理）について講演がなされた。個人的には、これまであまり中国から健康経営的な内容を聞くことがなかったが、経済発展とともに産業保健の取り組みも急速に進んでいる印象を受けた。

2. ポスタープレゼンテーション

前回の日本開催では実施されなかったが、これまでの学術会議の恒例であったポスタープレゼンテーションが開催された。ポスター発表者が1人3分間でポスター発表内容の要旨を発表し、若手の研究者が発表に慣れる場として重要な機会である。中国から5題、韓国から9題の計14題の発表が行われた。中国からは、炭鉱労働者のじん肺発症の疫学研究から、炭鉱におけるガス爆発による外傷性脳損傷の動物モデルを使用した研究の報告がみられた。韓国からは、様々な業種の作業関連疾患に関する報告がみられた。ポスターはブースに貼り出され、いつでも見ることができるスタイルであった。

¹ 産業医科大学 産業生態科学研究所 呼吸病態学研究室
産業医学ジャーナル 47(6): 56-59, 2024. doi: 10.34354/ohpfjrnl.47.6_56

3. オープニングセレモニー

翌14日の朝からオープニングセレモニーが開催された(写真1)。開会の挨拶として、大会長である中国職業安全健康協会(COSHA)のMA Jun氏より挨拶が行われ、次いで中国代表としてCOSHAのWANG Dexue氏、韓国代表として大韓産業保健協会(KIHA)のHUN Ki Baek氏、日本代表として産業医科大学元学長の東敏昭氏より祝辞が述べられた。



写真1 オープニングセレモニーの様子

4. キーノート

各国からそれぞれ座長、演者が登壇し講演された。

まず中国から、ZHOU Zhijun氏より、中国政府が進める中小企業における産業保健活動を支援する取り組みと課題について、HU Bin氏より、重慶市における中小企業への産業保健サービスの取り組みについて、XING Yafei氏より、化学物質の換気シミュレーションを用いたより良い作業環境管理やリスク予測の活用について講演された。

韓国からは、KIM Hyoung-Ryoul氏より、韓国における24時間稼働の物流サービスに關与する労働者への健康管理の課題や対策について講演された。

日本からは、大神明氏より、日本における個人健康記録と職域の情報を紐づけ管理することの重要性について講演された。

5. 一般口演

一般口演は2つの会場に分かれて16演題、15演題がそれぞれ発表された。韓国や日本からは参加者が少なかったこともあり、すべて中国からの発表であり、一部は英語ではなく、中国語で発表されていた。筆者がいたメイン会場では、中国語から英語への同時通訳がセッティングされていたことから、講演内容について英語で聴くことができたが、もう一つの会場では同時通訳はなかったようであった。第29回(2019年)の南京開催の時と同様に中国語だけのセッションになっていたかもしれない。

発表内容は、炭鉱労働者のじん肺に関する内容では、健康管理だけでなく、リスクアセスメント、じん肺診断における機械学習やAIの活用など幅広い分野の内容であった。中国の健康経営に関するコホート研究や、炭鉱でのガス爆発による脳への影響を観察した培養細胞試験など多岐にわたった。印象的な発表として、兵器を製造している研究機関の労働者に対する産業保健の話題があったことである。発表内容もAIなど最先端の技術の活用もあり、また中国全土からの発表が集まっていたこともあり、中国の勢いを感じたセッションであった。

6. バンケット

2日目の夕食では、バンケット(全体懇親会)が開催された。飛天鼓舞(太鼓と女性ダンサーのパフォーマンス)や、日本でも話題となった



写真2 バンケット：女子十二楽坊の演奏

女子十二楽坊、川劇変面（仮面を瞬時に変えるパフォーマンス）の催しがあり、ビールや白酒（パイチュウ）をいただきながら、中国や韓国の参加者とともに楽しい時間を過ごした。前回の日本開催ではコロナ禍の影響でバンケットを開催できなかったことから、久しぶりに会食しながらの交流となった。

7. シンポジウム

3日目の朝からシンポジウムが開催された。シンポジウムのテーマは「Occupational Health, Healthy enterprise creation, etc.」ということで、文字通り幅広い内容となった。発表形式は、質疑応答ありの一般口演のスタイルであり、登壇しディスカッションの時間はなかった。

中国から、WAN Zhi 氏より、化学物質中毒事故における緊急医療技術について、遠隔による毒物感知から無人による緊急救助などのツールが紹介された。ZHANG Yuanbao 氏からは、ナノ粒子の健康影響・ばく露のリスク評価に関して、ナノ粒子を吸入することによる気道沈着モデルの開発について発表された。

韓国から、SON Mia 氏より、韓国における介護職に長期間従事されている労働者を対象にアンケート調査が行われ、日本と同様に低賃金や介護作業における身体的負荷等の課題が挙げられていた。LEE Kang-Sook 氏からは、中小企業における男性労働者の喫煙行動と禁煙有無、職業との関連、禁煙プログラムの成功率の調査結果

が報告された。電子タバコの利用者で最もニコチン依存の割合が最も多く、宿泊・飲食・販売・清掃・警備などのサービス業のグループで最も禁煙成功率が高いとのことで、禁煙成功率を上げるためには、職業の種類や喫煙行動を考慮しプログラムを検討する必要があると発表された。

日本からは、筆者（友永）より、日本の労働者で発生した有機物質の一つであるアクリル酸ポリマーによる肺障害に関して、肺障害の機序解明を目的に実施した肺を構成する細胞を使用した培養細胞試験の結果を報告した（写真3）。姜英氏は、オフィス勤務と在宅勤務における身体活動レベルと座位時間を調査され、在宅勤務のほうが身体活動性は低下し座位時間が増加することを発表された。

8. 運営会議の審議内容

次回第32回は2025年6月4～6日に韓国・ソウルで開催すること、今後の学術会議には産業保健だけでなく産業安全も加えること、発表者の名前の英語表記を姓→名の順番にすることなどが決定された。

9. クロージングセレモニー

大会長の MA Jun 氏より閉会の挨拶が行われた。その後、各国代表からの挨拶がなされ、無事に学術会議は閉会となった（写真4）。



写真3 シンポジウムの様子（友永発表）



写真4 全体集合写真

おわりに

この学術会議は、新型コロナウイルス感染症の流行前の2019年の南京（第29回）、新型コロナウイルス感染症が落ち着かない中で2022年に行われた北九州（第30回）、そして流行が落ち着きをみせた今年2024年に第31回開催となった。本来であれば毎年、日本、韓国、中国と3か国持ち回りで実施していたが、コロナ禍で継続開催が危ぶまれていた。今回の開催についても、今年の3月になるまで本当に中国で開催されるのか不透明であった。しかしながら、中国側の尽力により盛会で終了し、来年の開催予定も決定された。今後は毎年開催がされるであろう。

コロナ禍を経て、オンラインでも簡単に交流できる時代となったが、やはり直接会って交流することは大切だと感じた。筆者自身、今年5月にモロッコのマラケシュで開催された ICOH

2024に参加し挨拶した中国の研究者と本学術会議で再会し、交流を深めることができた。3か国を取り巻く政治的な情勢は難しいが、実務者間では良好なコミュニケーションを継続し、今後も3か国が直接交流できる機会を絶やさないことが大事であると感じた。今回の発表を見ても、労働安全衛生に関する実務から基礎的な研究まで幅広い分野の内容であった。韓国からは、フードデリバリーなどの新しい業種の健康管理の課題への取り組み内容であり、中国からは、これまで古典的な炭鉱のじん肺の報告が多かった印象であったが、健康経営やAIの活用など取り組むテーマが多様になっていることを実感した。この学術会議の重要な点として、近隣3か国がどのような労働安全衛生の課題を抱え、解決しようとしているのか学ぶことできることだと考える。来年は多くの日本人が参加し、本学術会議を盛り上げていくことを切に願う。